

伝道の書

第一章 ダビデの子、エルサレムの王である
伝道者の言葉。

伝道者は言う、

三日の下で人が勞するすべての勞苦は、

その身になんの益があるか。

世は去り、世はきたる。

しかし地は永遠に変わらない。

五日はいで、日は没し、

その出た所に急ぎ行く。

風は南に吹き、また転じて、北に向かい、

めぐりにめぐって、またそのめぐる所に帰る。

七川はみな、海に流れ入る、

しかし海は満ちることがない。

川はその出てきた所にまた帰って行く。

八すべての事は人をうみ疲れさせる、

人はこれを言いつくすことができない。

目は見ることに飽きることがなく、

耳は聞くことに満足することがない。

九先にあったことは、また後にもある、

先になされた事は、また後にもなされる。
日の下には新しいものはない。

一〇「見よ、これは新しいものだ」と

言われるものがあるか、

それはわれわれの前にあった世々に、

すでにあつたものである。

二前の者のことは覚えられることがない、

また、きたるべき後の者のことも、

後に起る者はこれを覚えることがない。

三伝道者であるわたしはエルサレムで、イスラエルの

王であつた。三わたしは心をつくし、知恵を用いて、天

が下に行われるすべてのことを尋ね、また調べた。これ

は神が、人の子らに与えて、ほねおらせられる苦しい仕

事である。四わたしは日の下で人が行うすべてのわざを

見たが、みな空であつて風を捕えるようである。

五曲つたものは、まっすぐにすることができない、

欠けたものは数えることができない。

六わたしは心の中に語って言った、「わたしは、わたし

より先にエルサレムを治めたすべての者にまさつて、多

くの知恵を得た。わたしの心は知恵と知識を多く得た」。

七わたしは心をつくして知恵を知り、また狂気と愚痴と

を知ろうとしたが、これもまた風を捕えるようなもので

あると悟つた。

八それは知恵が多ければ悩みが多く、

知識を増す者は憂いを増すからである。

第二章

「わたしは自分の心に言った、「さあ、快樂をもつて、おまえを試みよう。おまえは愉快に過ぎるがよい」と。しかし、これもまた空であった。二わたしは笑いについて言った、「これは狂気である」と。また快樂について言った、「これは何をするのか」と。三わたしの心は知恵をもつてわたしを導いているが、わたしは酒をもつて自分の肉体を元気づけようと試みた。また、人の子は天が下でその短い一生の間、どんな事をしたら良いかを、見きわめるまでは、愚かな事をしようと思つた。四わたしは大きな事業をした。わたしは自分のために家を建て、ぶどう畑を設け、五園と庭をつくり、またすべて実のなる木をそこに植え、六池をつくつて、木のおい茂る林に、そこから水を注がせた。七わたしは男女の奴隷を買った。またわたしの家で生れた奴隷を持つていた。わたしはまた、わたしより先にエルサレムにいただれよりも多くの牛や羊の財産を持つていた。八わたしはまた銀と金を集め、王たちと国々の財宝を集めた。またわたしは歌うたう男、歌うたう女を得た。また人の子の楽しみとするそばめを多く得た。

九こうして、わたしは大いなる者となり、わたしより先にエルサレムにいたすべての者よりも、大いなる者となった。わたしの知恵もまた、わたしを離れなかった。一〇なんでもわたしの目の好むものは遠慮せず、わたしの

心の喜ぶものは拒まなかった。わたしの心がわたしのすべての労苦によつて、快樂を得たからである。そしてこれはわたしのすべての労苦によつて得た報いであつた。二そこで、わたしはわが手のなしたすべての事、およびそれをなすに要した労苦を顧みたと、見よ、皆、空であつて、風を捕えるようなものであつた。日の下には益となるものはないのである。

三わたしはまた、身をめぐらして、知恵と、狂気と、愚痴とを見た。そもそも、王の後に来る人は何をなし得ようか。すでに彼がなした事にすぎないのだ。四光が暗きにまさるように、知恵が愚痴にまさるのを、わたしは見た。五知者の目は、その頭にある。しかし愚者は暗やみを歩む。けれどもわたしはなお同一の運命が彼らのすべてに臨むことを知っている。六わたしは心に言った、「愚者に臨む事はわたしにも臨むのだ。それでどうしてわたしは賢いことがあるう」。わたしはまた心に言った、「これもまた空である」と。七そもそも、知者も愚者も同様に長く覚えられるものではない。きたるべき日には皆忘れられてしまうのである。知者が愚者と同じように死ぬのは、どうしたことであらう。八そこで、わたしは生きることをいとつた。日の下に行われるわざは、わたしに悪しく見えたからである。皆空であつて、風を捕えるようである。

九わたしは日の下で勞したすべての勞苦を憎んだ。わ

たしの後に来る人にこれを残さなければならぬからである。一九そして、その人が知者であるか、または愚者であるかは、だれが知り得よう。そうであるのに、その人が、日の下でわたくしが勞し、かつ知恵を働かしてなしたすべての勞苦をつかさどることになるのだ。これもまた空である。二〇それでわたくしはふり返つてみて、日の下でわたくしが勞したすべての勞苦について、望みを失つた。三今ここに人があつて、知恵と知識と才能をもつて勞しても、これがために勞しない人に、すべてを残して、その所有とさせなければならぬのだ。これもまた空であつて、大いに悪い。三三そもそも、人は日の下で勞するすべての勞苦と、その心づかいによつてなんの得るところがあるか。三三そのすべての日はただ憂いのみであつて、そのわざは苦しく、その心は夜の間も休まることがない。これもまた空である。

二四人は食ひ飲みし、その勞苦によつて得たもので心を樂しませるより良い事はない。これもまた神の手から出ること、を、わたくしは見た。二五だれが神を離れて、食ひ、かつ樂しむことのできる者があるう。二六神は、その心にかたう人に、知恵と知識と喜びとをくださる。しかし罪びとには仕事を与えて集めることと、積むことをさせられる。これは神の心にかたう者にそれを賜わるためである。これもまた空であつて、風を捕えるようである。

第三章 二天が下のすべての事には季節があり、

すべてのわざには時がある。

二生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、三殺すに時があり、いやすに時があり、四こわすに時があり、建てるに時があり、泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、五石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、六捜すに時があり、失うに時があり、七保つに時があり、捨てるに時があり、裂くに時があり、縫うに時があり、八黙るに時があり、語るに時があり、愛するに時があり、憎むに時があり、九戦うに時があり、和らぐに時がある。

一〇わたくしは神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事を見た。二神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。三わたくしは知つてゐる。人にはその生きながらえている間、樂しく愉快に過ごすよりほかに良い事はない。三またすべての人が食ひ飲みし、そのすべての勞苦によつて樂しみを得ることは

神の賜物である。二四わたしは知っている。すべて神がなさる事は永遠に変わることがなく、これに加えることも、これから取ることもできない。神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れをもつようになるためである。二五今あるものは、すでにあつたものである。後にあるものも、すでにあつたものである。神は追いやられたものを尋ね求められる。

二六わたしはまた、日の下を見たが、さばきを行う所にも不正があり、公義を行う所にも不正がある。二七わたしは心に言った、「神は正しい者と悪い者とをさばかれる。神はすべての事と、すべてのわざに、時を定められたからである」と。二八わたしはまた、人の子らについて心に言った、「神は彼らをためして、彼らに自分たちが獣にすぎないことを悟らせられるのである」と。二九人の子らに臨むところは獣にも臨むからである。すなわち一樣に彼らに臨み、これの死ぬように、彼も死ぬのである。彼らはみな同様の息をもっている。人は獣にまさるところがない。すべてのものは空だからである。三〇みな一つ所に行く。皆ちりから出て、皆ちりに帰る。三一だれが知るか、人の子らの霊は上にのぼり、獣の霊は地にくだるかを。三二それで、わたしは見た、人はその働きによって楽しむにこした事はない。これが彼の分だからである。だれが彼をつれていって、その後の、どうなるかを見させることができようか。

第四章

一わたしはまた、日の下に行われるすべてのしえたげを見た。見よ、しえたげられる者の涙を。彼らを慰める者はない。しえたげる者の手には権力がある。しかし彼らを慰める者はいない。二それで、わたしはなお生きてゐる生存者よりも、すでに死んだ死者を、さいわいな者と思つた。三しかし、この両者よりもさいわいなのは、まだ生れない者で、日の下に行われる悪しきわざを見ない者である。

四また、わたしはすべての労苦と、すべての巧みなわざを見たが、これは人が互にねたみあつてなすものである。これもまた空であつて、風を捕えるようである。

五愚かなる者は手をつかねて、自分の肉を食う。

六片手に物を満たして平穩であるのは、両手に物を満たして労苦し、風を捕えるのにまさる。

七わたしはまた、日の下に空なる事のあるのを見た。八ここに人がある。ひとりであつて、仲間もなく、子もなく、兄弟もない。それでも彼の労苦は窮まりなく、その目は富に飽くことがない。また彼は言わない、「わたしはだれのために労するのか、どうして自分を楽しませないのか」と。これもまた空であつて、苦しいわざである。九ふたりはひとりにまさる。彼らはその労苦によって良い報いを得るからである。一〇すなわち彼らが倒れる時には、そのひとりとその友を助け起す。しかしひとりであつて、その倒れる時、これを助け起す者のない者はわ

ざわいである。二またふたりが一緒に寝れば暖かである。ひとりだけで、どうして暖かになり得ようか。三人がもし、そのひとりを攻め撃つたなら、ふたりで、それに当るであろう。三つよりの綱はたやすくは切れない。

三貧しくて賢いわらばは、老いて愚かで、もはや、いさめをいれることを知らない王にまさる。四たとい、その王が獄屋から出て、王位についた者であっても、また自分の国に貧しく生れて王位についた者であっても、そうである。五わたしは日の下に歩むすべての民が、かのわらべのように王に代って立つのを見た。六すべての民は果てしがない。彼はそのすべての民を導いた。しかし後に来る者は彼を喜ばない。たしかに、これもまた空であって、風を捕えるようである。

第五章 一神の宮に行く時には、その足を慎むがよい。近よって聞くのは愚かな者の犠牲をささげるのにまさる。彼らは悪を行って、ことを知らないからである。二神の前で軽々しく口をひらき、また言葉を出そうと、心にあせてはならない。神は天にいまし、あなたは地におるからである。それゆえ、あなたは言葉を少なくせよ。

三夢は仕事の多いことによつてきたり、愚かなる者の声は言葉の多いことによつて知られる。

四あなたは神に誓いをなすとき、それを果すことを延ばしてはならない。神は愚かな者を喜ばれないからであ

る。あなたの誓ったことを必ず果せ。五あなたが誓いをして、それを果さないよりは、むしろ誓いをしないほうがよい。六あなたの口が、あなたに罪を犯させないようにせよ。また使者の前にそれは誤りであつたと言つてはならない。どうして、神があなたの言葉を怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてよからうか。

七夢が多ければ空なる言葉も多い。しかし、あなたは神を恐れよ。

八あなたは国のうちに貧しい者をしえたげ、公道と正義を曲げることのあるのを見ても、その事を怪しんではならない。それは位の高い人よりも、さらに高い者があつて、その人をうかがうからである。そしてそれらよりもなお高い者がある。九しかし、要するに耕作した田畑をもつ国には王は利益である。

一〇金銭を好む者は金銭をもって満足しない。富を好む者は富を得て満足しない。これもまた空である。

一一財産が増せば、これを食う者も増す。その持ち主は目にそれを見るだけで、なんの益があるか。

一二働く者は食ふことが少なくても多くても、快く眠る。しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることをゆるさない。

一三わたしは日の下に悲しむべき悪のあるのを見た。すなわち、富はこれをたくわえるその持ち主に害を及ぼすことである。一四またその富は不幸な出来事によつてうせ

行くことである。それで、その人が子をもうけても、彼の手には何も残らない。^{二五}彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰って行く。彼はその労苦によつて得た何物をもその手に携へ行くことができない。^{二六}人は全くその来たように、また去って行かなければならない。これもまた悲しむべき悪である。風のために労する者になんの益があるか。^{二七}人は一生、暗やみと、悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある。^{二八}見よ、わたしが見たところの善かつ美なる事は、神から賜わった短い一生の間、食ひ、飲み、かつ日の下で労するすべての労苦によつて、楽しみを得る事である。これがその分だからである。^{二九}また神はすべての人に富と宝と、それを楽しむ力を与え、またその分を取らせ、その労苦によつて楽しみを得させられる。これが神の賜物である。^{三〇}このような人は自分の生きる日のことを多く思わない。神は喜びをもつて彼の心を満たされるからである。

第六章

「わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。これは人々の上に重い。^一すなわち神は富と、財産と、誉とを人に与えて、その心に慕うものを、一つも欠けることのないようにされる。しかし神は、その人にこれを持つことを許されないので、他人がこれを持つようになる。これは空である。悲しき病である。^三たとい人は百人の子をもうけ、また命長く、そのよわいの日が

多くても、その心が幸福に満足せず、また葬られることがなければ、わたしは言う、流産の子はその人にまさると。^四これはむなしく来て、暗やみの中に去って行き、その名は暗やみにおおわれる。^五またこれは日を見ず、物を知らない。けれどもこれは彼よりも安らかである。^六たとい彼は千年に倍するほど生きても幸福を見ない。みな一つ所に行くのではないか。

七人の労苦は皆、その口のためである。しかしその食欲は満たされない。^八賢い者は愚かな者になんのまさるところがあるか。また生ける者の前に歩むことを知る貧しい者もなんのまさるところがあるか。^九目に見る事は欲望のさまよい歩くにまさる。これもまた空であつて、風を捕えるようなものである。

「今あるものは、すでにその名がつけられた。そして人はいかなる者であるかは知られた。それで人は自分よりも力強い者と争うことはできない。^二言葉が多ければむなし事も多い。人になんの益があるか。^三人はその短く、むなししい命の日を影のように送るのに、何が人のために善であるかを知ることができよう。だがその身の後に、日の下に何があるであろうかを人に告げることができるか。

第七章

「良き名は良き油にまさり、死ぬる日は生るる日にまさる。^一悲しみの家にはいるのは、

宴会の家にはいるのにまさる。

死はすべての人の終りだからである。

生きている者は、これを心にとめる。

三 悲しみは笑いにまさる。

顔に憂いをもつことによつて、

心は良くなるからである。

四 賢い者の心は悲しみの家にある、

愚かな者の心は楽しみのある家にある。

五 賢い者の戒めを聞くのは、

愚かな者の歌を聞くのにまさる。

六 愚かな者の笑いは

かまの下に燃えるいばらの音のようである。

これもまた空である。

七 たしかに、しえたげは賢い人を愚かにし、

まいないは人の心をそこなう。

八 事の終りはその初めよりも良い。

耐え忍ぶ心は、おごり高ぶる心にまさる。

九 氣をせきたてて怒るな。

怒りは愚かな者の胸に宿るからである。

一〇 昔が今よりもよかつたのはなぜか」と言うな。

あなたがこれを問うのは知恵から出るのではない。

二 知恵に財産が伴うのは良い。

それは日を見る者どもに益がある。

三 知恵が身を守るのは、金銭が身を守るようである。

しかし、知恵はこれを持つ者に生命を保たせる。

これが知識のすぐれた所である。

三 神のみわざを考えみよ。

神の曲げられたものを、

だれがまっすぐにすることができるか。

四 順境の日には楽しみ。逆境の日には考えよ。神は人

に将来どういう事があるかを、知らせないために、彼と

これとを等しく造られたのである。

五 わたしはこのむなししい人生において、もろもろの事

を見た。そこには義人がその義によつて滅びることがあ

り、悪人がその悪によつて長生きすることがある。六 あ

なたは義に過ぎてはならない。また賢きに過ぎてはなら

ない。あなたはどうして自分を滅ぼしてよからうか。

七 悪に過ぎてはならない。また愚かであつてはならな

い。あなたはどうして、自分の時のこないのに、死んで

よからうか。八 あなたがこれを執るのはよい、また彼か

ら手を引いてはならない。神をかしこむ者は、このすべ

てからのがれ出るのである。

九 知恵が知者を強くするのは、十人のつかさが町にお

るのにまさる。

一〇 善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない。

三人の語るすべての事に心をとめてはならない。これ

はあなたが、自分のしもべのあなたをのろう言葉を聞か

ないためである。三 あなたもまた、しばしば他人をの

ろつたのを自分の心に知っているからである。

三 わたしは知恵をもってこのすべての事を試みて、「わたしは知者となろう」と言つたが、遠く及ばなかつた。

四 物事の理は遠く、また、はなはだ深い。だれがこれを見いだすことができよう。

五 わたしは、心を転じて、物を知り、事を探り、知恵と道理を求めようとし、また悪の愚かなこと、愚痴の狂気であることを知ろうとした。

六 わたしは、その心が、わなと網のような女、その手が、かせのような女は、死よりも苦い者であることを見いだした。

七 神を喜ばす者は彼女からのがれる。しかし罪びとは彼女に捕えられる。

八 伝道者は言う、見よ、その数を知ろうとして、いぢぢ数えて、わたしが得たものはこれである。

九 わたしは千人のうちにひとりの男子を得たけれども、わたしは千人のうちにひとりの女子をも得なかつた。

一〇 そのすべてのうちに、ひとりの女子をも得なかつた。

一一 見よ、わたしが得た事は、ただこれだけである。すなわち、神は人を正しい者に造られたけれども、人は多くの計略を考え出した事である。

第八章 だれが知者のようになり得よう。

一 だれが事の意義を知り得よう。

二 人の知恵はその人の顔を輝かせ、またその粗暴な顔を変える。

三 王の命を守れ。すでに神をさして誓つたことゆゑ、驚くな。三事が悪い時は、王の前を去れ、ためらうな。彼は

すべてその好むところをなすからである。四 王の言葉は

決定的である。だれが彼に「あなたは何をするのか」と言うことができようか。

五 命令を守る者は災にあわな

い。知者の心は時と方法をわきまえている。六 人の悪が

彼の上に重くても、すべてのわざには時と方法がある。

七 後に起る事を知る者はない。どんな事が起るかをだれ

が彼に告げ得よう。八 風をとどめる力をもつ人はない。

また死の日をつかさどるものはない。戦いには免除はない。

九 また悪はこれを行ふ者を救ふことができな

い。わたしはこのすべての事を見た。また日の下に行われるも

ろもろのわざに心を用いた。時としてはこの人が、かの人を治めて、これに害をこうむらせることがある。

一〇 またわたしは悪人の葬られるのを見た。彼らはいつ

も聖所に入りし、それを行つたその町ではめられた。これもまた空である。

二 悪しきわざに対する判決がすみやかに行われな

いために、人の子らの心はもっぱら悪を行ふことに傾いて

いる。三 罪びとで百度悪をなして、なお長生きするものがあるけれども、神をかしこみ、み前に

恐れをいだく者には幸福があることを、わたしは知つ

ている。四 しかし悪人には幸福がない。またその命は影

のようであつて長くは続かない。彼は神の前に恐れをい

だかないからである。

五 地の上に空な事が行われている。すなわち、義人であつて、悪人に臨むべき事が、その身に臨む者がある。

また、悪人であつて、義人に臨むべき事が、その身に臨む者がある。わたしは言つた、これもまた空であると。二五そこで、わたしは歡樂をたたえる。それは日の下では、人にとつて、食ひ、飲み、楽しむよりほかに良い事はなからである。これこそは日の下で、神が賜つた命の日の間、その勤勞によつてその身に伴うものである。

二六わたしは心をつくして知恵を知ろうとし、また地上に行われるわざを昼も夜も眠らずに窮めようとしたとき、二七わたしは神のもろもろのわざを見たが、人は日の下に行われるわざを窮めることはできない。人はこれを尋ねようと勞しても、これを窮めることはできない。また、たとい知者があつて、これを知ろうと思つても、これを窮めることはできないのである。

第九章 一わたしはこのすべての事に心を用いて、このすべての事を明らかにしようとした。すなわち正しい者と賢い者、および彼らのわざが、神の手にあることを明らかにしようとした。愛するか憎むかは人にはわからない。彼らの前にあるすべてのことは空である。

二すべての人に臨むところは、みな同様である。正しい者にも正しくない者にも、善良な者にも悪い者にも、清い者にも汚れた者にも、犠牲をささげる者にも、犠牲をささげない者にも、その臨むところは同様である。善良な人も罪びとも異なることはない。誓いをなす者も、誓いをなすことを恐れる者も異なることはない。三すべて

の人に同一に臨むのは、日の下に行われるすべての事のうちの悪事である。また人の心は悪に満ち、その生きている間は、狂氣がその心のうちにあり、その後は死者のもとに行くのである。四すべて生ける者に連なる者には望みがある。生ける犬は、死せるしにまさるからである。五生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさへも、ついに忘れられる。六その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない。

七あなたは行つて、喜びをもつてあなたのパンを食べ、楽しい心をもつてあなたの酒を飲むがよい。神はすでに、あなたのわざをよみせられたからである。

八あなたの衣を常に白くせよ。あなたの頭に油を絶やすな。

九日の下で神から賜つたあなたの空なる命の日の間、あなたはその愛する妻と共に楽しく暮すがよい。これはあなたが世にあつてうける分、あなたが日の下で勞する勞苦によつて得るものだからである。一〇すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。二わたしはまた日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのではない。

また賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るのでもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。三人はその時を知らない。魚がわざわいの網にかかり、鳥がわなにかかるように、人の子らもわざわいの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである。

三 またわたしは日の下にこのような知恵の例を見た。これはわたしにとって大きな事である。二四 ここに一つの小さい町があつて、そこに住む人は少なかったが、大いなる王が攻めて来て、これを囲み、これに向かつて大きな雲梯を建てた。二五 しかし、町のうちにひとりの貧しい知恵のある人がいて、その知恵をもつて町を救った。ところがだれひとり、その貧しい人を記憶する者がなかった。二六 そこでわたしは言う、「知恵は力にまさる。しかしかの貧しい人の知恵は軽んぜられ、その言葉は聞かれなかった」。

二七 静かに聞かれる知者の言葉は、愚かな者の中のかさたる者の叫びにまさる。二八 知恵は戦いの武器にまさる。しかし、ひとりの罪びとは多くの良きわざを滅ぼす。

第一〇章 「死んだはえは、香料を造る者の

あぶらを臭くし、
少しの愚痴は知恵と誉よりも重い。

二 知者の心は彼を右に向けさせ、
愚者の心は左に向けさせる。

三 愚者は道を行く時、思慮が足りない、自分の愚かなことをすべての人に告げる。四 つかさたる者があなたに向かつて立腹しても、あなたの所を離れてはならない。五 温順は大いなることが和らげるからである。

五 わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。それはつかさたる者から出るあやまちに似ている。六 すなわち愚かなる者が高い地位に置かれ、富める者が卑しい所に座している。七 わたしはしもべたる者が馬に乗り、君たる者が奴隷のように徒歩であるくのを見た。

八 穴を掘る者はみずからこれに陥り、石がきをこわす者は、へびにかまれる。九 石を切り出す者はそれがために傷をうけ、木を割る者はそれがために危険にさらされる。

一〇 鉄が鈍くなったとき、人がその刃をみがかなければ、力を多くこれに用いねばならない。

しかし、知恵は人を助けてなし遂げさせる。二 へびがもし呪文をかけられる前に、かみつけば、へび使は益がない。

三 知者の口の言葉は恵みがある、しかし愚者のくちびるはその身を滅ぼす。

三 愚者の口の言葉の初めは愚痴である、またその言葉の終りは悪い狂気である。

一四 愚者は言葉を多くする、

しかし人はだれも後に起ることを知らない。

だれがその身の後に起る事を

告げることができようか。

一五 愚者の労苦はその身を疲れさせる、

彼は町にはいる道をさえ知らない。

一六 あなたは王はわらべであつて、

その君たちが朝から、ごちそうを食べる国よ、

あなたはわざわいだ。

一七 あなたは王は自主の子であつて、

その君たちが酔うためでなく、力を得るために、

適当な時にごちそうを食べる国よ、

あなたはさいわいだ。

一八 怠惰によつて屋根は落ち、

無精によつて家は漏る。

一九 食事は笑いのためになされ、

酒は命を樂しませる。

二〇 金銭はすべての事に應じる。

二一 あなたは心のうちでも王をのろつてはならない、

また寢室でも富める者をのろつてはならない。

二二 空の鳥はあなたの声を伝え、

翼あるものは事を告げるからである。

第一章 あなたはパンを水の上に投げよ、

多くの日の後、あなたはそれを得るからである。

二 あなたは一つの分を七つまた八つに分けよ、

あなたは、どんな災が地に起るかを知らないからだ。

三 雲がもし雨で満ちるならば、地にそれを注ぐ、

また木がもし南か北に倒れるならば、

その木は倒れた所に横たわる。

四 風を警戒する者は種をまかない、

雲を観測する者は刈ることをしない。

五 あなたは、身ごもつた女の胎の中で、どうして霊が

骨にはいるかを知らない。そのようにあなたは、すべて

の事をなされる神のわざを知らない。

六 朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。

実るのは、これであるか、あれであるか、あるいは二つ

ともに良いのであるか、あなたは知らないからである。

七 光は快いものである。目に太陽を見るのは楽しいこ

とである。

八 人が多くの年、生きながらえ、そのすべてにおいて

自分を楽しませても、暗い日の多くあるべきことを忘れ

てはならない。すべて、きたらんとする事は皆空である。

九 若い者よ、あなたの若い時に樂しめ。あなたの若い

日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心の道に歩み、あ

なたの目の見るところに歩め。ただし、そのすべての事

のために、神はあなたをさばかれることを知れ。

一〇 あなたは心から悩みを去り、あなたのからだから痛

みを除け。若い時と盛んな時はともに空だからである。
 第一二章 「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄つて、「わたしにはなんの楽しみもない」と言うようにならない前に、二また日や光や、月や星の暗くならない前に、雨の後にまた雲が帰らないうちに、そのようにせよ。三その日になると、家を守る者は震え、力ある人はかがみ、ひきこなす女は少ないために休み、窓からのぞく者の目はかすみ、町の門は閉ざされる。その時ひきこなす音は低くなり、人は鳥の声によつて起きあがり、歌の娘たちは皆、低くされる。五彼らはまた高いものを恐れる。恐ろしいものが道にあり、あめんどうは花咲き、いなごはその身をひきずり歩き、その欲望は衰え、人が永遠の家に行こうとするので、泣く人が、ちまたを歩きまわる。六その後、銀のひもは切れ、金の皿は砕け、水がめは泉のかたわらで破れ、車は井戸のかたわらで砕ける。七ちりは、もと

のように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る。八伝道者は言う、「空の空、いっさいは空である」と。
 九さらに伝道者は知恵があるゆえに、知識を民に教えた。彼はよく考え、尋ねきわめ、あまたの箴言をまとめた。一〇伝道者は麗しい言葉を得ようとつとめた。また彼は真実の言葉を正しく書きしるした。
 一二知者の言葉は突き棒のようであり、またよく打った釘のようなものであつて、ひとりの牧者から出た言葉が集められたものである。三わが子よ、これら以外の事にも心を用いよ。多くの書を作れば際限がない。多く学べばからだが疲れる。
 一三事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。一四神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである。